【原　　著】

全学教職課程の質保証に関する研究（2）
―学生の平成 24 年度の初年次プログラム前後における意識変容に着目して―

三島　知剛　髙旗　浩志　後藤　大輔　樫田　健志
江木　英二　曽田　佳代子　加賀　勝

A Research on Quality Assurance in Teacher Training Course in Okayama University (2)
– Focused on Change of Students' Consciousness Before and After Teacher Training Program for Freshman –

Tomotaka MISHIMA, Hiroshi TAKAHATA , Daisuke GOTO, Tsuyoshi KASHIDA,
Eiji EGI, Kayoko SODA, Masaru KAGA

2014
岡山大学教師教育開発センター紀要 第 4 号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.4, March 2014

岡山大学教師教育開発センター紀要，第４号（2014），pp.82-89

【研究論文】

原　著

全学教職課程の質保証に関する研究（2）

―学生の平成 24 年度の初年次プログラム前後における意識変容に着目して―

三島　知剛[※1]　髙旗　浩志[※1]　後藤　大輔[※1]　樫田　健志[※1]　江木　英二[※1]
曽田　佳代子[※1]　加賀　勝[※1※2]

岡山大学では，教師教育開発センターによる全学の教員養成教育の質保証に取り組んでいる。本学では，教育学部以外に在籍し，教員免許状の取得を志す学生（文学部，法学部，経済学部，理学部，工学部，農学部，環境理工学部，マッチングプログラムコース）を対象にした１年次の核になるプログラムとして「全学教職オリエンテーション」と「母校訪問」を設けている。本研究では，平成 24 年度にこれら２つのプログラムを受けた学生を対象にした事前事後によるアンケート調査結果に基づき，学生の意識変容を検討した。その結果，（１）教職志望度が上昇する傾向があるが，教員免許取得希望度や教員採用試験の受験意志は低下すること，（２）「教職観」に関する様々な意識が変容し，教職理解が深まるが，「4 つの力に対する自信」は部分的な変容であること，（３）「大学生活や将来への思い」に関して部分的であるがポジティブに変容していくこと，が主に示唆された。

キーワード：全学教職課程，全学教職課程初年次プログラム，全学教職オリエンテーション，母校訪問，学生の意識変容

※１　岡山大学教師教育開発センター
※２　岡山大学大学院教育学研究科

Ⅰ．はじめに

岡山大学においては，平成 22 年度に教師教育開発センターの設置以降，全学の教員養成教育に取り組んでいる。そして，教育学部による「教員養成コア・カリキュラム」の研究成果を基にして，全学教職課程の構造化を行い，１年次から４年次までを３つの期に分け，それぞれねらいを設定している（図１）。そのうち，教職への出発点である１年次を「教職への意欲向上期」とし，教職志望を確認し，教職への夢と希望をふくらませることをねらいとしている。そして，そのための核になるプログラムとして，本学では「全学教職オリエンテーション」と「母校訪問」を設けている。本研究では，本学における第１期のプログラムの効果を平成 24 年度にこれらのプログラムを受けた学生を対象にした質問紙調査の結果から検討することとする。

ここで，１年次の２つのプログラムの内容について記述しておく。まず，全学教職オリエンテーションは，例年，５～６月頃，文系学生・理系学生を対象に概ね同じ内容で２回にわたって行われる。ここでは，大きく①教職課程の履修に係る見通しを与えること，②次のプログラムである母校訪問の事前指導を行うこと，の２つのことを行う。平成 24 年度の全学教職オリエンテーションの内容を示したものが表１である。なお，当初は文系・理系学生それぞれ，２コマ連続で実施し１日で終わらせていたのものを，１コマずつ２日に分散させたり，学生が受け身的に説明を受けるだけではなく，能動的に参加できるようにグループワークを取り入れるなどプログラムの内容や構成を修正している。

次に，母校訪問についてである。母校訪問は，学生が数か月前まで高校生として通っていた高校に教職を目指している大学生として１日訪問し，２つのことに取り組むという本学独自のプログラムである。取り組みの１つは，学生が取得を希望する免許教科の授業観察と学級観察である。もう１つは，恩師へのインタビューである。なお，これらは最低限取り組まなければならないことで，後輩を前に大学生活について話をしたり，部活動指導の補助をしたりするなど様々な機会を得ている学生もいる。母校訪問実施の流れを表２に示す。このように，母校訪問は単に１日母校を訪問すれば終わりというものではなく，母校訪問の経験を報告書にまとめ，さらには母校訪問事後指導に参加してはじめて，母校訪問のプログラムを終えたことになるのである。

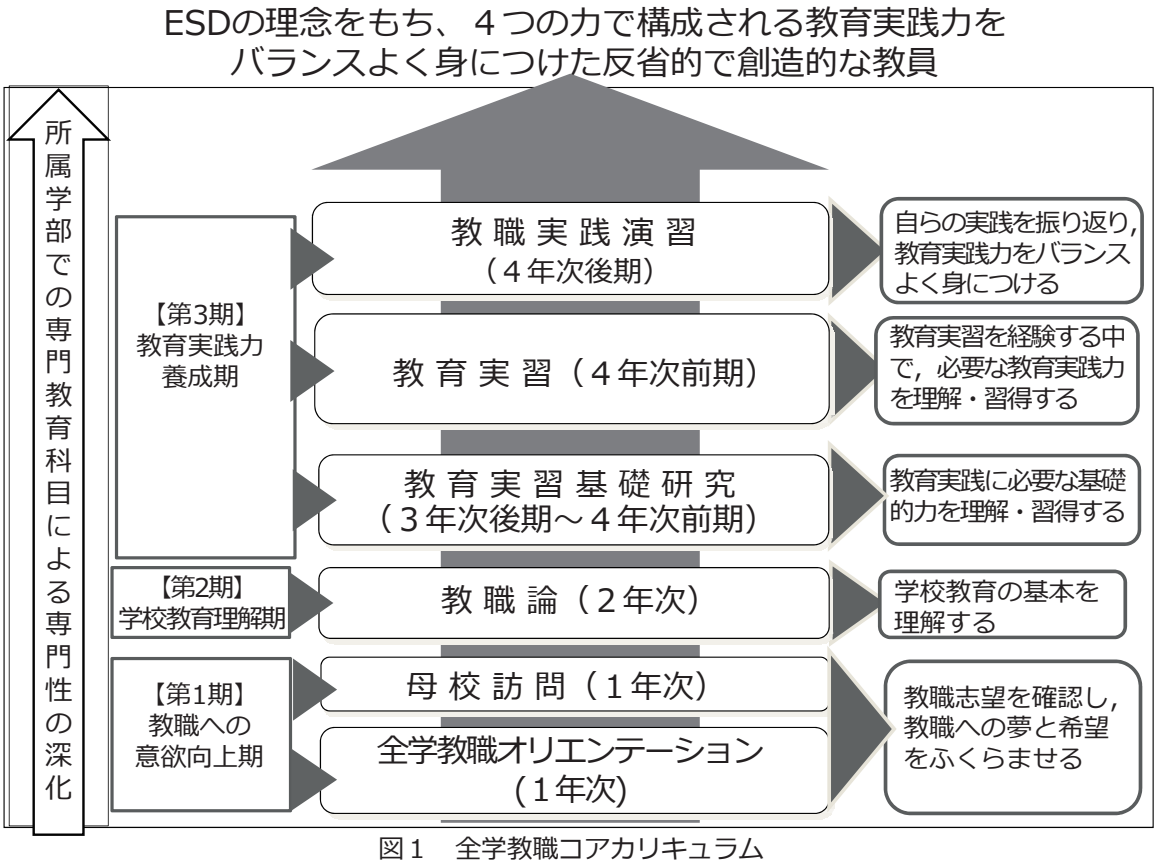

図１　全学教職コアカリキュラム

一方，様々な取り組みやプログラムを充実させていくためには，効果検証が必要になってくる。このことに関し，教師教育開発センターでは，定期的なアンケート調査を実施し，データに基づいた教職課程の改善・改革に取り組んでいる。本学の１年次プログラムに関するこれまでの知見として，後藤・髙旗・樫田・三島・江木・曽田・高橋・加賀（2012），高旗・後藤・三島・樫田・江木・曽田・高橋・加賀（2013）がある。これらをまとめると（１）母校訪問に参加した学生の 90% が母校訪問を充実していたと回答していること，(2) 本学教職課程の DP である 4 つの力（学習指導力・生徒指導力・コーディネート力・マネジメント力）に対する母校訪問後の自己評価において 60 ～ 70%の学生が「充分できる」「できる」「概ねできる」と回答していること，(3) 母校訪問を始めとするプログラムが教職志向性の低い学生に一定のインパクトを与えていること，といった成果が見出されている。

このように本学の１年次プログラムの効果検証はこれまでも行われてきているが，検討方法は概ね以下のようにまとめられる。すなわち，（1）回想法的なデータにより検討をしていること，（2）教職課程履修者数の推移を追うことにより検討していること，(3) プログラム事後のみの調査結果により検討していること，である。もちろん，こういった方法による検討も重要であるが，回想法的なデータによる検討の場合，客観的なデータが得られる可能性があるという利点が考えられる一方で，回答が社会的望ましさに引

表1　H24年度の全学教職オリエンテーションの内容

項目	所要時間	内容
＜前半部＞1日目		
1	5分	全体挨拶
2	15分	アンケート
3	20分	岡山大学で教師を目指すにあたっての心構え及びポートフォリオへの自己チェック
4	30分	母校訪問について
5	5分	母校訪問エントリー方法について
6	15分	質疑応答及び書連絡
＜後半部＞2日目		
1	20分	教員免許取得に係る履修方法や要件等について
2	55分	グループワーク
3	15分	連絡事項 （CST，センターホームページ，センターの紹介）

きずられる可能性も残る。すなわち，プログラムの事後にプログラムの効果を直接的に質問された場合，過度に高く評価した回答をしてしまう可能性があるのである。また，直接的にプログラムの効果を質問していなくても，プログラム事後の一時点だけの測定でもって，プログラムの効果を検討することは厳密には難しい。すなわち，プログラム事前のデータと比較してどうだったのかという観点で検討をする必要があるのである。また，教職課程の履修者数の推移を追っていくことも重要なことではあるが，プログラムの効果を検討していく際，対象学生がどのような回答をしているのかということを変容データでもって検討していく必要もあると考えられる。しかし，この点に関しての検討が十分になされているとは言えない。

そこで，本研究では，平成24年度に本学の全学教職課程初年次プログラムを受けた学生を対象に，本学の第1期におけるプログラムの効果をプログラムの事前事後の調査による学生の意識変容から検討することを目的とした。

表2　母校訪問実施の流れ

1. 全学教職オリエンテーションに参加する
2. 『教職実践ポートフォリオ』に基づいて自己の現状と課題を確認する
3. 「母校訪問計画書」を作成し，提出する
4. 各自で高校へ電話連絡をする
5. 母校訪問をする
6. 母校訪問報告書を作成する（母校へのお礼状を作成し送付する）
7. 母校訪問事後指導に参加する

Ⅱ．方法

1　調査対象

調査対象は，平成24年度に全学教職オリエンテーションと母校訪問を受けた学生であり，2回とも回答が得られた206名が分析対象であった。なお，学部別の参加人数としては，文学部58名，法学部6名，経済学部13名，理学部63名，工学部17名，環境理工学部26名，農学部16名，マッチングプログラムコース7名，であった。

2　調査時期

調査は平成24年5月にそれぞれ文系及び理系の学生を対象に行われた全学教職オリエンテーションの前半部（1回目）で1回目の調査が行われた。同年10月にそれぞれ文系及び理系の学生対象に行われた母校訪問後の母校訪問事後指導で2回目の調査が行われた。なお，当日止む負えない事情でオリエンテーションや事後指導に参加できなかった学生に関しては，個別に回答を求めた。そして，以下の内容に関する回答を2回の調査において求めた[1]。

3　調査項目

（1）教職志向性

教職に対する志向性について測定するために，「教員免許取得希望度」「教員採用試験受験意志」「教職志望度」「教職への魅力感」についての設問全4項目を用いた[2]。なお，回答は，それぞれ5件法であった。

（2）教職観

教職に対するイメージや考えを測定するために，「教職は優れた人格を必要とする職業だと思う」「教職は人に尽くすことで喜びを味わえる職業だと思う」など12項目を用いた。なお，回答は，「全くそう思わない」～「とてもそう思う」の5件法であった。

（3）4つの力に対する自信

本学教職課程では，「学習指導力」「生徒指導力」「コーディネート力」「マネジメント力」の4つの力で構成される教育実践力をバランスよく身につけた教員を育てることを目指している。その4つの力に関して，髙旗ほか（2013）でも用いられている15項目を用いた。そして，本研究では，15項目が4つの力のどの力に位置づくのかを以下のように想定した。すなわち，「学習指導力」に関する項目として，「子どもに分かりやすい授業を行うこと」など5項目，「生徒指導力」に関する項目として，「子どもの自主性を引き出すこと」など5項目，「コーディネート力」に関する項目として，「年輩の教師と良好な関係を築くこと」など4項目，「マネジメント力」として「学級担任としてクラスをまとめること」の1項目，であった。なお，回答は「全く自信がない」～「とても自信がある」の5件法であった。

（4）大学生活及び将来への思い

学生の現時点での大学生活に対する思いや将来への思いを測定するために，「専門的な知識や技術が身についてきていると思う」「定職に就けるかどうか不安がある」など15項目を用いた。なお，回答は，「全くそう思わない」～「とてもそう思う」の5件法であった。

Ⅲ．結果と考察

1　教職志向性の変容

1年次プログラムの前後における教職志向性の変容について検討するために，項目ごとにそれぞれ全学教職オリエンテーション時と母校訪問事後指導時で対応のある t 検定を行った（表3）。その結果，「教員免許取得希望度」（t（205）＝3.89，p ＜ .01），「教員採用試験受験意志」（t（205）＝3.10，p ＜ .01），「教職志望度」（t（205）＝1.84，p ＜ .10）の3項目で有意な得点の変容または傾向が見られた。変容の仕方を見ると，「教職志望度」は，母校訪問事後指導時に得点が有意に高くなっているが，「教員免許取得希望度」「教員採用試験受験意志」は得点が有意に低くなっている。

まず，教職志望度が高まったことについては，本学のプログラムを通して学生が教師になりたいという思いを強めたことが考えられる。とりわけ，母校訪問の効果は大きいことが考えられる。つまり，授業や学級を生徒ではない視点で観察することの新鮮さや恩師へのインタビューを通して教職の実態や魅力を知ることにより教職への志望度が高まったのであろう。学生が教職志望をする主要な理由の一つに恩師の影響があることが先行研究より窺える（例えば，木村・中澤・佐久間，2006；善明，2007）。このうち，木村他（2006）では，学生に教員を志望する理由として12項目から複数回答で回答を求めた結果，「子どもが好きだから」についで「すばらしい先生との出会い」が多かったことを見出している。このように学生の教職志望に与える恩師の影響の強さを踏まえると，母校で1日とは言え恩師と関わる機会が学生の教職志望にプラスに作用した可能性も考えられる。また，母校訪問とは時期や期間，内容等が異なるため直接的な比較には注意が必要だが，教育学部生を対象とした教育実習の前後で教職志望度が高まるという知見がこれまで指摘されている（例えば，児玉（2012））。本学のプログラムは，教育実習に比べると期間が短く，経験する内容も少ないことが予想される。にもかかわらず教職志望度が高まるというのは意義深い知見であると言える。

一方，得点が下がっていた2項目についてである。まず，「教員採用試験受験意志」に関しては，先述の「教職志望度」と一見矛盾する結果のように見えるが，これは学生の教職志望度がまだ強固ではないということなのであろう。すなわち，漠然と教師になりたいという思いが高まったものの，実際に教員採用試験を受験することに関しては，慎重になっている可能性が考えられる。また，このことには，教師にはなりたいと思うが，母校訪問での授業観察や恩師へのインタビューを通して教師の魅力と共に，大変さについても学ぶ中で，教師としての適性感や自信が持てずにいることが関係しているのかもしれない。次に，「教員免許取得希望度」の得点が下がっていることについてだが，これは学生が教員免許取得を真摯に捉えるようになったことが関係していると考えられる。すなわち，全学教職オリエンテーションでの教員免許取得に係る説明や母校訪問での経験，さらには教職を本気で目指す他の学生との交流によって教員免許取得に対する本気度が増してきている結果であると考えられる。

2　教職観の変容

教職観を測定する項目12項目に対してそれぞれ全学教職オリエンテーション時と母校訪問事後指導時で対応のある t 検定を行った（表4）。その結果，「教育に関わる専門的な知識や哲学が必要だと思う」（t（205）＝5.22，p ＜ .01），「高い教育実践力が必要な職業だと思う」（t（205）＝2.89，p ＜ .01），「教科に関する専門的な知識が必要な職業だと思う」（t（205）＝3.78，p ＜ .01），「豊かなコミュニケーション能力が必要な職

表3 学生の全学教職オリエンテーション時と母校訪問後における「教職志向性」の平均値とSD及びt検定結果

	全学教職オリエンテーション時		母校訪問後		t値	
	平均	SD	平均	SD		
教員免許取得希望度	4.67	0.56	4.48	0.67	3.89	**
教員採用試験受験意志	3.73	1.06	3.57	1.06	3.10	**
教職志望度	3.50	1.08	3.60	0.95	1.84	†
教職への魅力感	4.03	0.89	4.09	0.86	1.07	

** p＜.01　† p＜.10

業だと思う」（t（205）＝3.62，p ＜ .01），「教職は社会的に尊敬される職業だと思う」（t（205）＝3.17，p ＜ .01），「教職は優れた人格を必要とする職業だと思う」（t（205）＝2.23，p ＜ .05），「経済的に安定した職業だと思う」（t（205）＝1.73，p ＜ .10），「教職は人に尽くすことで喜びを味わえる職業だと思う」（t（205）＝3.53，p ＜ .01）の 8 項目で有意な得点の変容または傾向が見られた。

変容の仕方を見ると，「経済的に安定した職業だと思う」を除く 7 項目で得点が上がっていることから，教職に関する理解が深まっていることが示唆された。内訳を見ていくと，専門的な知識や実践力の必要性の理解や教職への肯定的な理解が増していることが窺える。一方で，「経済的に安定した職業だと思う」については，唯一得点が下がっていた。このことは，教職への肯定的な理解とは考えにくいものの，教職の現状を理解するという意味では，教職理解を深めている結果の一つとして解釈可能であろう。その意味では，教職に対してポジティブな側面のみではなく，一見ネガティブともとれる側面についての理解も深めていることから，学生は教職に対してステレオタイプ的な見方ではなく，多面的な見方ができるようになった可能性を本結果は示唆していると考えられる。その他，変容の見られなかった項目が 4 項目見られるものの，変容の見られた項目の多さから，学生が本学の 1 年次プログラムを通して教職への理解を深めていると考えられる。

3　4 つの力に対する自信

4 つの力を測定する 15 項目に対してそれぞれ全学教職オリエンテーション時と母校訪問事後指導時で対応のある t 検定を行った（表 5）。その結果，3 項目について有意な得点の変容または傾向が見られた。変容の仕方を見ると，「学習指導力」の中の「子どもに分かりやすい授業を行うこと」（t（205）＝2.23，p ＜ .05）が低下していた。また，「生徒指導力」の中の「子どもの自主性を引き出すこと」（t（205）＝2.17，p ＜ .05），「コーディネート力」の中の「保護者と良好な関係を築くこと」（t（205）＝1.87，p ＜ .10）が高まっていた。

このうち，低下した項目に関しては，母校訪問において実際の授業を観察したり，恩師へインタビューしたりする中で，その難しさを感じとり自信を低下させた可能性が考えられる。一方，得点が高まった 2 項目に関しては，例えばこの内容に関して，母校訪問の中の恩師へのインタビューの中で，話を聞くことができ不安感が軽減した可能性も考えられるが，本研究からだけでは十分な考察が難しく，さらに知見を蓄積していく必要があると考えられる。

しかしながら，全体としては，部分的な得点の変化は見られたものの，自信への影響はあまりなかったという結果であった。自信はセルフ・エフィカシー（自己効力感）と捉えることができるが，坂野（2002）によると自己効力感が変化する情報源には，「遂行行動の達成」（振る舞いを実際に行い，成功体験をもつこと），「代理的経験」（他人の行動を観察すること），「言語的説得」（自己強化や他者からの説得的な暗示），「情動的喚起」（生理的な反応の変化を体験してみること），の 4 つがあるという。本学の 1 年次プログ

表4　学生の全学教職オリエンテーション時と母校訪問後における「教職観」の平均値とSD及び t 検定結果

項目	全学教職オリエンテーション時		母校訪問後		t値	
	平均	SD	平均	SD		
教育に関わる専門的な知識や哲学が必要だと思う	3.83	0.87	4.19	0.81	5.22	**
高い教育実践力が必要な職業だと思う	4.40	0.65	4.58	0.71	2.89	**
教科に関する専門的な知識が必要な職業だと思う	4.44	0.63	4.66	0.63	3.78	**
豊かなコミュニケーション能力が必要な職業だと思う	4.60	0.61	4.78	0.57	3.62	**
教職は社会的に尊敬される職業だと思う	3.20	0.90	3.40	0.92	3.17	**
教職は優れた人格を必要とする職業だと思う	3.93	0.96	4.07	0.88	2.23	*
教職は高い倫理を必要とする職業だと思う	3.82	0.88	3.91	0.91	1.54	
経済的に安定した職業だと思う	3.40	0.93	3.28	0.92	1.73	†
教師もサラリーマンと同じ労働者だと思う	3.28	1.15	3.28	1.17	0.07	
教職は人に尽くすことで喜びを味わえる職業だと思う	3.61	1.06	3.88	0.98	3.53	**
教師は勤務時間外も生徒や学校のことを考えている必要があると思う	3.48	1.11	3.47	1.06	0.15	
プライベートでも教師には「教師らしさ」が求められると思う	3.00	1.06	3.09	1.15	1.01	

** p＜.01　* p＜.05　† p＜.10

ラムの中では，例えば母校訪問において恩師の授業を観察したり（代理的経験），恩師から励ましを受けたりする機会（言語的説得）はあるかもしれないが，自信が変化するには時間が短いと考えられるし，4つの情報源が全てあるとは考えにくい。また，自信は1年次の「教職への意欲向上期」で育むのではなく，教育実習等も実施されるその後のプログラムを通して段階的に育まれるべきことであると考えることもできることから，本研究の結果は当然であるとも考えられる。

4　大学生活及び将来への思い

全15項目に対してそれぞれ全学教職オリエンテーション時と母校訪問事後指導時で対応のある t 検定を行った（表6）。その結果，「専門的な知識や技術が身についてきていると思う」（t（205）＝2.29，p ＜ .05）「幅広い教養が身についてきていると思う」（t（205）＝2.55，p ＜ .05）「将来の職につながる資格や免許が取得できると思う」（t（205）＝2.08，p ＜ .05），「短大か専門学校に進んでいれば良かったと思う」（t（205）＝1.72，p ＜ .10）の4項目について有意な得点の変容または傾向が見られ，全て得点は高まっていた。このうち，「短大か専門学校に進んでいれば良かったと思う」は意味合いが異なるが，これらの項目は，学生が各学部において専門性を深化させつつ，教職課程の履修についても前向きに捉えるようになっていることを表す結果と考えられる。とりわけ，「将来の職につながる資格や免許が取得できると思う」という意識が高まっていることは，本学の1年次プログラムが有効に機能していることを示す結果であると考えられる。

表5　学生の全学教職オリエンテーション時と母校訪問後における「4つの力に対する自信」の平均値とSD及び t 検定結果

4つの力	項目	全学教職オリエンテーション時 平均	全学教職オリエンテーション時 SD	母校訪問後 平均	母校訪問後 SD	t値
（学）	子どもに分かりやすい授業を行うこと	3.29	0.95	3.16	0.95	2.28 ＊
（学）	子どもを惹きつける授業を行うこと	3.04	0.96	3.06	0.95	0.26
（学）	子どもが興味を持てる教材を作ること	3.07	0.88	3.14	0.91	1.08
（学）	自らの授業実践を反省し高めること	3.72	0.75	3.81	0.78	1.51
（学）	子どもにきちんとした基礎学力をつけること	3.50	0.79	3.50	0.88	0.07
（生）	子どもの自主性を引き出すこと	3.04	0.83	3.19	0.93	2.17 ＊
（生）	子どもに校則をきちんと守らせること	3.08	0.86	3.07	0.88	0.20
（生）	子どもの気持ちを分かってあげられること	3.50	0.85	3.58	0.88	1.12
（生）	いじめや不登校の問題にきちんと対応すること	3.30	0.98	3.37	1.03	0.89
（生）	一人一人の子どもときちんと向き合うこと	3.69	0.87	3.75	0.96	0.89
（コ）	地域社会に教師として貢献すること	3.22	0.85	3.17	0.95	0.79
（コ）	年輩の教師と良好な関係を築くこと	3.64	0.95	3.66	1.02	0.29
（コ）	同僚と良好な関係を築くこと	3.81	0.81	3.84	0.86	0.51
（コ）	保護者と良好な関係を築くこと	3.06	0.91	3.19	0.91	1.87 †
（マ）	学級担任としてクラスをまとめること	3.00	0.94	3.02	0.95	0.30

※（学）は学習指導力，（生）は生徒指導力，（コ）はコーディネート力，（マ）はマネジメント力を指す。　＊ p＜.05　† p＜.10

表6　学生の全学教職オリエンテーション時と母校訪問後における「現在の大学生活及び将来への思い」に関する平均値とSD及び t 検定結果

項目	全学教職オリエンテーション時 平均	全学教職オリエンテーション時 SD	母校訪問後 平均	母校訪問後 SD	t値
専門的な知識や技術が身についてきていると思う	2.76	0.96	2.92	1.01	2.29 ＊
幅広い教養が身についてきていると思う	2.89	0.92	3.06	0.95	2.55 ＊
将来の職につながる資格や免許が取得できると思う	3.33	0.86	3.47	0.91	2.08 ＊
普段から時間を有効に使えていると思う	2.66	0.87	2.72	1.04	0.96
明確な目標をもってこの大学に進学した	3.45	1.17	3.49	1.14	0.59
安定した職業に就くためには学歴が必要だと思う	3.74	0.97	3.64	0.95	1.31
四年制大学卒業であれば就職に有利だと思う	3.07	1.00	3.03	1.06	0.45
四年制大学を出れば就職に有利だとは限らない	3.70	0.99	3.72	1.04	0.21
就職の際，大学の名前は関係ないと思う	2.69	1.11	2.80	1.15	1.34
経済的に早く保護者から自立したいと思う	3.89	0.88	3.85	0.98	0.61
できることなら学生のままでいたいと思う	3.05	1.14	3.15	1.19	1.26
進学せずに就職しておけば良かったと思う	1.50	0.81	1.61	0.95	1.57
他人に流されるままに大学生になった気がする	1.83	1.07	1.89	1.14	0.76
短大か専門学校に進んでいれば良かったと思う	1.33	0.63	1.43	0.78	1.72 †
定職に就けるかどうか不安がある	3.38	1.17	3.27	1.29	1.33

＊ p＜.05　† p＜.10

Ⅳ．まとめと今後の課題

本研究では，本学の第１期におけるプログラムの効果をプログラムの事前事後の調査による学生の意識変容から検討することを目的とし，平成24年度に本学の全学教職課程初年次プログラムを受けた学生の結果を分析した。以下に結果を要約し，まとめとする。

教職志向性の変容についての結果から，学生の教職志望度が高まること及び教員免許取得や教員採用試験の受験に対して真摯に捉えるようになったことが示唆された。これは教職課程の履修を学生が我が事として捉え始め，本学の１年次プログラムがそのきっかけになっていることが考えられる。とりわけ，教職志望度は高まるが，教員採用試験の受験意志は低下するというのは興味深い知見であると言えよう。2年次以降の第２期，第３期を通して，教員採用試験の受験意志が高まっていくように支援していくことが必要であろう。

次に，教職観と４つの力についての自信の変容から，学生が教職について様々な側面の理解を深め，ポジティブな側面のみならずネガティブな側面についての理解も深めている一方で，自信に関しては部分的に高まったり低下したりした項目があったものの全体としてはほとんど変容しないことが示唆された。本学の第２期以降で，教職理解をさらに深めていくこと，また教育実践力を身につけ，自信を高めることが必要であろう。

大学生活及び将来への思いについては，専門的な知識や技術や幅広い教養が身に付いてきているという思いが強まっていた。これは学生が所属学部における専門教育科目や1, 2年次に主に履修する教養科目にしっかり取り組み高い満足度を感じているということだと考えられる。また，教員免許の取得や教職課程の履修に関しても意義があるものだという思いが強まっており，意義深い結果と言えるだろう。

以上の結果は，本学の１年次プログラムの一定の効果を実証的に示したものであると考えられる。これまでも，プログラムの効果は明らかにされていたが，プログラムの事前事後における学生の変容データでもって効果を示せたことが本研究の何よりの意義であると言える。今後，プログラムのさらなる改善や充実に向け，引き続き調査を行い，全学教職課程の質保証の一助としてデータや知見を蓄積していくことが必要であろう。

注

１．ここで示しているのは，本研究で分析対象としたもののみであり，実際の調査では，事前事後の調査で共通して用いていない内容の設問が複数あった。

２．実際の設問は「あなたは現在，教員免許を取得しようと考えていますか」「あなたは現在，教員採用試験を受験しようと考えていますか」「あなたは現在「教師になりたい」と考えていますか」「あなたは「教職」というものに，どの程度の魅力を感じていますか」であった。

引用文献

後藤大輔・髙旗浩志・樫田健志・三島知剛・江木英二・曽田佳代子・高橋香代・加賀勝（2012）.「母校訪問」を核とする全学教職課程初年次プログラムの成果と課題　岡山大学教師教育開発センター紀要　2, 126 － 135.

木村育恵・中澤智惠・佐久間亜紀（2006）. 国立教員養成系大学の学生像と教職観―東京学芸大学における教員養成課程と新課程の比較　東京学芸大学紀要（総合教育科学系）　57, 403 － 414.

児玉真樹子（2012）. 教職志望変化に及ぼす教育実習の影響過程における「職業的（進路）発達にかかわる諸能力」の働き―社会・認知的キャリア理論の視点から―　教育心理学研究　60, 261 － 271.

坂野雄二（2002）. 人間行動とセルフ・エフィカシー　坂野雄二・前田基成（編著）　セルフ・エフィカシーの臨床心理学（pp.2-11）　北大路書房

高旗浩志・後藤大輔・三島知剛・樫田健志・江木英二・曽田佳代子・高橋香代・加賀勝（2013）. 全学教職課程の質保証に関する実証的研究（1）―平成22年度入学制の経年変化を中心に―　岡山大学教師教育開発センター紀要　3, 80 － 89.

善明宣夫（2007）. 多様化する教育実習生像の検討　関西学院大学教職教育研究センター紀要　12, 25 － 32.

Title (9 pt)　A Research on Quality Assurance in Teacher Training Course in Okayama University (2)
Subtitle (9 pt) ―Focused on Change of Students' Consciousness Before and After Teacher Training Program for Freshman―

Tomotaka MISHIMA*1, Hiroshi TAKAHATA *1, Daisuke GOTO*1, Tsuyoshi KASHIDA*1, Eiji EGI*1, Kayoko SODA*1, Masaru KAGA*1*2

Keywords:All-University Teacher-Training Course, Teacher Training Program for Freshmen in National University, Teaching Profession Orientation, The Visit to Their Old High School, Change of Students' Consciousness

*1 Center for Teacher Education and Development, Okayama University
*2 Graduate School of Education, Okayama University